

抜き出しを許す付加詞について

On the Weak-island Adjuncts

福田 稔

付加詞からの移動は禁止されるという従来の研究に対して、Truswell (2011) は、付加詞が島を形成せず容認される事例を指摘している。本稿では、禁止される事例は定形節の付加詞であり、許されるのは非定形節の付加詞であるという事実を基に、それぞれが強い島と弱い島に対応することを指摘する。そして、Boeckx (2012) の主張を援用し、定形節の付加詞からの移動は、移動する要素が項・非項に拘らず、統語的な理由によって排除されると論じ、非定形節の付加詞からの項の wh 要素の移動は統語的に派生可能であるが、非項の wh 要素の移動は統語的な理由によって排除されると主張する。また、非定形節の付加詞から項の wh 要素が移動した事例の判断の多様性は、Truswell (2011) が指摘するように非統語的な要因による。具体的な構造分析として、Borgonovo (1997) の提案を採用し、理論的な枠組みとして Stroik (2009) と Stroik and Putnam (2013) のサバイブ・ミニマリズムの移動と素性の分析を援用して、上述の事例は説明できると提案する。

キーワード：付加詞、強い島、弱い島、wh島、派生理論、移動、抜き出し、ミニマリスト・プログラム、サバイブ・ミニマリズム

目次

- I はじめに
- II 付加詞の意味と統語派生
 - 1 Truswell (2011)の分析
 - 2 Narita (2011)の分析
 - 3 残された問題
- III 付加詞の相違点
 - 1 付加詞の位置
 - 2 移動の違い
 - 3 判断の多様性
- IV 派生理論による分析
 - 1 非定形節の付加詞
 - 2 定形節の付加詞

V おわりに

I はじめに¹

従来、付加詞 (adjunct) は強い島 (strong island) と見なされ、(1) に示したように、付加詞からの wh 要素の移動は項 (argument)・非項 (non-argument) に拘らず許されないと考察されてきた²。

(1) 付加詞からの移動

- a. **Who/Which girl* did John arrive [after Bill kissed *t*]?
- b. **How/In what way* did John arrive [after Bill kissed Mary *t*]?

一方、(2) に示したように、wh 島に代表される弱い島 (weak island) からの移動は、項の wh 要素である *who* や *which girl* の場合は容認性が多少低くなるだけだが、非項の *how* や *in what way* の場合は全く容認されない。

(2) Wh島からの移動

- a. ??*Who/Which girl* do you wonder [whether Bill kissed *t*]?
- b. **How/In what way* do you wonder [whether Bill kissed Sue *t*]? (Boeckx (2012: 16-17))

ここで、(1) の付加詞は定形節 (finite clause) であることに注意されたい。従来の統語研究では、非定形節 (non-finite clause) の付加詞からの移動も、(3) に示したように、(1) と同じく移動は項・非項に拘らず許されないと考察されてきた。

(3) 非定形節の付加詞からの移動

- a. **What* does John work [thinking about *t*?] (Truswell (2011: 155))
- b. ??*Who* did you go home [before talking to *t*?] (Takahashi (1994: 69))
- c. **How* did you go home [before fixing the car *t*?] (ibid.)

(1) から (3) の事実の説明の代表が、適正統率 (Proper Government) という概念を援用した Huang (1982) の抜き出し領域に課せられる条件 (Condition on Extraction Domains) である。しかし、近年、Truswell (2011) は付加詞からの移動が容認される事例 (4) を根拠に、統語的な分

析を批判し、意味的な分析を提唱した。(4a)は目的を表す to 不定詞節(rationale clause)の付加詞、(4b)は裸の現在分詞節(bare present participial clause)の付加詞、(4c)は前置詞に導かれる分詞節(prepositional participial clause)の付加詞である。どの付加詞も主節との関連性が密であるという特徴がある³。本発表では、(4b)と(4c)の事例を中心に考察する。

- (4) a. What are you working so hard [to achieve *t*]? (Truswell (2011: 133))
b. What did John drive Mary crazy [whistling *t*]? (Truswell (2011: 155))
c. %Which book did John design his garden [after reading *t*]? (Truswell (2011: 140))

(4)の事実は、Chomsky (1993, 1995)が提唱するミニマリスト・プログラム (Minimalist Program) において Narita (2011)が統語的な説明を試みている。しかし、第II節で指摘するように、Truswell (2011)と Narita (2011)の分析はいくつかの問題に直面する。そこで、本稿ではそれぞれの提案の優れた着眼点を取り入れた代案を提唱する。

第III節では、定形節の付加詞(1)と非定形節(現在分詞節)の付加詞(4b, c)を、強い島と弱い島と並行的に分析することを提案する。また、主節への時制解釈の依存を統語的に分析した Borgonovo (1997)の提案を援用して、動詞の投射(いわゆるVP)での定形節の付加詞と非定形節の付加詞の構造位置の相違を導く。

第IV節では、強い島と弱い島の相違点に関する Boeckx (2012)の主張を採用し、定形節の付加詞からの移動は統語的に排除されるが、非定形節の付加詞からの移動は統語的には派生可能であると論じる。また、この相違は、Stroik (2009)や Stroik and Putnam (2013)が提唱するサバイブ・ミニマリズム (Survive-minimalism) と呼ばれる派生理論に基づいて説明できることを示す。

第V節では議論をまとめ、残された可能性について触れる。

II 付加詞の意味と統語派生

1 Truswell (2011)の分析

Truswell (2011)は、付加詞からの移動に関する様々な事例の容認性の差は意味的・語用論的な要因によると論じている。例えば、(4)の容認される事例では、主節の事象と付加詞の事象との間に密接な意味関係がある。例えば、(4b)には、「ジョンが何かの曲を口笛で吹いたことで、メアリーはイライラした」という原因と結果の関係、(4c)には、「何かの本を読んで、それを参考にして庭を設計した」という密接な関係がある。そのような場合は、意味的条件(5)に示したように、主節と付加詞が単一の事象を表すようになり、そのときに限って付加詞からの wh 移動が可能になると Truswell は分析している。

(5) a. The Single Event Condition

An instance of *wh*-movement is legitimate only if the minimal constituent containing the head and the foot of the chain can be construed as describing a single event. (Truswell (2011: 38))

b. The Single Event Grouping Condition

An instance of *wh*-movement is legitimate only if the minimal constituent containing the head and the foot of the chain can be construed as describing a single *event grouping*. (Truswell (2011: 157))

しかし、注意すべきことがある。単一の事象の解釈が得られる場合は、結局のところ付加詞は非定形節であり、かつ、Truswell (2011: 116-118) 自身の (6) の統語分析から分かるように、付加詞は VP に付加しているという統語的な条件が整ってないといけない。つまり、(5) の意味的条件は、(6) の統語的環境が整った上に成り立っているのである。

(6) a. [_{VP} OP [_{VP} VP XP]] (XP = adjunct)

b. i. [_{TP} [_{TP} T [_{VP1} OP VP₁]] [_{XP} X [_{TP} T [_{VP2} OP VP₂]]]]

ii. [_{VP1} [_{VP1} OP VP₁]] [_{XP} X [_{TP} T [_{VP2} OP VP₂]]]]

さらに、(5) の条件は *wh* 移動一般に言及しているにも拘らず、Truswell (2011) は、(7) のような項の *wh* 要素の移動しか扱っていない。その結果、非項の *wh* 要素 *How quietly* が移動する事例(8)を説明できないという経験的な問題に直面する。

(7) What did John arrive [whistling *t*]? (Truswell (2011: 155))

(8) **How quietly* did John arrive [singing Waltzing Mathilda *t*]? (Borgonovo and Neeleman (2000: 204))

2 Narita (2011)の分析

Narita (2011) はミニマリスト・プログラムの枠組みで、Truswell (2011) が扱った付加詞からの移動の事例を分析している。移動に関する容認性の違いは、究極的には (9) にまとめた付加詞の構造位置の違いに起因すると仮定している。

(9) 抜き出しを許さない付加詞(*high adjunct*)は *v/v** が C 統御しない位置にある。抜き出しを許す付加詞 (*low adjunct*) は *v/v** が C 統御する位置にある。

まず、Narita (2011: 81-82) は、移動などの統語操作を駆動する端素性 (edge feature) を担えるのは語彙項目だけであると仮定し、(10) の H- α schema によって併合 (Merge) が適用する際には、必ず1つの要素は語彙項目であると提案している。

- (10) H- α Schema: Merge (H, α) \rightarrow α {H, α }
Merge must take at least one LI as its input.

その結果、(11) に示したように、句同士を併合する対併合 (Pair-Merge) は禁止される。さらに、Narita (2011: 89) によると、(12) にあるように、内的併合 (Internal Merge) も語彙項目に適用することになるので、内的併合は外的併合 (External Merge) と同様の操作となり、2種類の併合を一つに統合することが可能となる。

- (11) *{XP, XP}: No two phrases (non-LIs) can be merged.
(12) Only LIs can undergo IM (i.e. Internal Merge).

また、Narita (2011: 53) は全ての範疇がフェイズになりえると仮定している。(13) と (14) に示したように、補部の位置に対応する内部領域 (interior) が未与値の素性 (unvalued feature) を持たない場合に、その位置が転送 (Transfer) される。すると、フェイズ不可侵条件 (Phase-Impenetrability Condition) によって、転送の後には、この位置に統語操作がアクセスできなくなる。

- (13) An OS Σ can be a phase only if the interior of Σ is convergent (i.e., containing no unvalued features).
(14) Phase-Impenetrability Condition:
After Transfer applies to a phase Σ , the interior of Σ becomes inaccessible to further syntactic computation.

さて、本稿での議論に関係するのは CP と vP、それに名詞句である。名詞句は (15) に示した KP 分析を Narita (2011) は採用している。(15a) と (15b) に示したように、 \emptyset 素性の与値 (valuation) が終わると、補部が転送され、K だけが残る。K は語彙項目なので、後の派生で内的併合の適用を受けることができる。

- (15) 名詞句の構造分析
a. [K_[uCase, u ϕ] [the_[D] man_[N]]]
b. [K_[uCase, v ϕ] [the_[D] man_[N]]] \rightarrow Transfer
c. K_[uCase, v ϕ]

次に、(16) と (17) を検討してみよう。Narita (2011: 111) は付加詞の内部領域つまり補部が転送を受けて語彙項目の *because* や *after* だけが残ると仮定している。*because* も *after* も語彙項目なので、後の派生の段階において、併合の相手は句でも語彙項目でもよいはずである。しかし、Narita は (8) を仮定しているので、*because* は *v* が C 統御しない位置に併合し、*after* は *v* が C 統御する位置に併合せざるを得ない。

- (16) 定形節の付加詞の場合
- a. [because [she failed the exam]] → Transfer
 - b. because
- (17) 非定形節の付加詞の場合
- a. [after [reading the book]] → Transfer
 - b. after

次に、(18) と (19) を検討してみよう。付加詞の中に *wh* 要素があると、その要素が移動した後内部領域が転送される。よって、(18c) と (19c) に示したように、2つの要素から成る統語構築物 (syntactic object) が残る。これは語彙項目ではないので、後の派生段階における併合の相手の要素は語彙項目だけとなる。

- (18) 定形節の付加詞からの *wh* 移動
- a. [because [she failed what]]
 - b. [what [because [she failed *t*]]] → Transfer
 - c. [what because]
- (19) 非定形節の付加詞からの *wh* 移動
- a. [after [reading what]]
 - b. [what [after [reading *t*]]] → Transfer
 - c. [what after]

これらのことを念頭に、まず、(4c) の派生を検討してみよう。(4c) は (20) として再掲してある。

- (20) %Which book did John design his garden [after reading *t*]? (= (4c))

既に指摘したように、(19c) の統語構築物 *what after* が併合する相手の要素は語彙項目に限られる。そこで、V と目的語の K が併合する前に、(21) に示したように、(19c) の統語構築物 [what after] は K に併合すると Narita は論じている。(21c) に示した統語構築物 [K [Wh after]] に、V

と *v* が次々に併合し、さらに主語の *K* が併合されて (22a) が派生する。(22a) では、(9) の「抜き出しを許す付加詞 (low adjunct) は *v/v** が *C* 統御する位置にある」という条件が満たされている。続いて、併合や転送が適用し、最終的には *wh* 要素の移動が可能となる。

- (21) a. [K [his garden]][*Wh* [after ... *t*_{wh} ...]] → Transfer
 b. K [*Wh* after] → Merge (i.e. EM)
 c. [K [*Wh* after]] (Narita (2011: 110))
- (22) a. [K [v [V [K [*Wh* after]]]]] → Merge (i.e. IM)
 b. [*Wh* [K [v [V [K [*Wh* after]]]]]] → Transfer
 c. [K [*Wh* v]] T → Merge (i.e. EM)
 d. [T [K [*Wh* v]]] C → Merge (i.e. EM)
 e. [C [T [K [*Wh* v]]]] → Merge (i.e. EM)
 f. [C [K [T [K [*Wh* v]]]]] → Merge (i.e. EM)
 g. [*Wh* [C [K [T [K [*Wh* v]]]]]] → Transfer
 h. [*Wh* C]

次に、(23) のように定形節の付加詞からの移動が容認されない理由を考えてみよう。

- (23) **What* did the man criticize Mary [because she failed *t*]?

まず、(24) に示したように、Narita (2011: 111, footnote 11) は束縛理論の条件 *C* の違反から、*because* 節の付加詞は主語位置、つまり、*TP* 指定部より低い位置にあると仮定している。これと同時に、(9) の「抜き出しを許さない付加詞 (high adjunct) は *v/v** が *C* 統御しない位置にある」という条件が課せられるので、*because* 節の付加詞はこの 2 つを同時に満たす位置に付加しなければならない。

- (24) **He* got sick because/since/after *John* ate that fish.

上述の仮定から、(23) の主節の派生は、概略 (25) のように示すことができる。

(25) 主節The man criticized Maryの派生

- | | | | |
|----|---------------------------|----------------------|-------------------|
| a. | K | [v[criticized Mary]] | → Merge (i.e. IM) |
| b. | [K [v [criticized Mary]]] | | → Transfer |
| c. | T | [K v] | → Merge (i.e. EM) |
| d. | C | [T [K v]] | → Merge (i.e. EM) |
| e. | [C [T [K v]]] | K | → Merge (i.e. IM) |
| f. | [C [K [T [K v]]]] | | |

すると、because 節の付加詞は (25c) の統語構築物 [K v] か、(25d) の統語構築物 [T [K v]] に付加することになる。これらは語彙項目でない点に注意されたい。しかし、wh 要素を含む because 節の付加詞は、(18c) に示したように転送の後に [what because] になり、これも語彙項目ではない。したがって、(25c) でも (25d) でも併合の適用対象とならない。その帰結として、because 節の付加詞からの移動は不可能となる。

(9) の仮説を基にすると、確かに移動に関する 2 種類の付加詞の違いは説明可能となる。しかしながら、(26b) が容認されないという事実は説明できないという経験的な問題に直面する。

- (26) a. You thought [because/since/after John ate that fish [he got sick]].
 b. **What* do you think [because/since/after John ate *t* [he got sick]]?

(26b) の具体的な派生は以下の通りである。まず、(24) で生じていた条件 C の違反であるが、because 節の付加詞を文頭に前置すると、(26) のように条件 C の違反は解消する⁴。

- (27) Because/Since/After *John* ate that fish, *he* got sick.

さらに、(26a) に示したように、(27) は動詞 think の補部として埋め込むことができるが、(26b) に示したように、wh 要素を移動させることはできない。(26b) の派生は概略 (28) のようになる。

(28) a.	[<i>Wh</i> [because [...]]]	[C [K [T [K v]]]]	→ Transfer
b.	[<i>Wh</i> because]	C	→ Merge (i.e. EM)
c.	[[<i>Wh</i> because] C]	V	→ Merge (i.e. EM)
d.	[V [[<i>Wh</i> because] C]]	v	→ Merge (i.e. EM)
e.	[v [V [[<i>Wh</i> because] C]]]	K	→ Merge (i.e. EM)
f.	[K [v [V [[<i>Wh</i> because] C]]]]	<i>Wh</i>	→ Merge (i.e. IM)
g.	[<i>Wh</i> [K [v [V [[<i>Wh</i> because] C]]]]]		→ Transfer
h.	[<i>Wh</i> [K v]]	T	→ Merge (i.e. EM)
i.	[T [<i>Wh</i> [K v]]]	C	→ Merge (i.e. EM)
j.	[C [T [<i>Wh</i> [K v]]]]	K	→ Merge (i.e. IM)
k.	[C [K [T [<i>Wh</i> [K v]]]]]	<i>Wh</i>	→ Merge (i.e. IM)
l.	[<i>Wh</i> [C [K [T [<i>Wh</i> [K v]]]]]]]		→ Transfer
m.	[<i>Wh</i> C]		

(28a)と(28b)は、(wh要素を含む)because節の付加詞が主節と併合する派生段階を示している。主節は転送の後に、語彙項目のCになる点に注意されたい。(28e)は、(28b)で派生した構造物が動詞の補部として併合することを示している。この後に、vや主語のKが併合し、さらにwh要素が移動して、転送が適用する。ところが、(28h)からの派生は(22c)からの派生と同じになる。つまり、Naritaの分析では、結局は、(26b)を(20)と同様に容認してしまうのである。

3 残された問題

未解決の課題を以下の①から③にまとめてみよう。これらの問題については、次の第Ⅲ節で検討する。

① 動詞の投射における付加詞の位置に関する違いをどのように導き出すかという問題がある。例えば、(9)の条件であるが、言うまでもなく、この条件がどのようにして導かれるのかという根拠を示す方が望ましい。

② 定形節の付加詞と非定形節の付加詞は移動に関して容認性の違いがあるが、この事実を説明することも必要である。

③ 非定形節の付加詞からの移動は意味的な条件を受け、多様性がある。これをどう説明するかという問題も残る。

III 付加詞の相違点

1 付加詞の位置

まず、①として指摘した問題を検討してみよう。付加詞の位置に関しては、移動を許す付加詞は非定形節であることに着目し、Borgonovo (1997) の分析を採用する。具体的には、Borgonovo (1997: 22) は非定形節の付加詞に対して (29) の構造を仮定している。

(29) [TP Spec [T T [VP [VP ...] [GerP OP_i [Ger [V e_i]]]]]]

非定形節の付加詞の時制解釈は主節に依存するという事実を説明するため、時制空演算子が Gerund Phrase の最上位の指定部を占め、これが上位にある主節の時制か、時を表す前置詞に認可されると Borgonovo は論じている⁵。つまり、時制解釈のために、非定形節の付加詞は T が C 統御する V の投射に付加しているのである⁶。

最近の統語構造分析を仮定すれば、Gerund Phrase は Aspect Phrase または vP に対応すると思われる。本稿では、(4b) の現在分詞節から成る付加詞については (30) の構造を、前置詞に導かれる場合は (31) を仮定する⁷。つまり、付加詞は動詞の投射の修飾語として機能しているという分析を仮定することになる。

(30) 裸の現在分詞の構造

[TP ... [VP [VP ...] [VP OP [V Ving ...]]]]

(31) 前置詞に導かれる分詞節の構造

[TP ... [VP [VP ...] [PP P [VP OP [V Ving ...]]]]]]

一方、定形節の付加詞は独自の時制を持ち、時制解釈を主節に依存しないので、その構造に時制空演算子は無い。したがって、主節の T が定形節の付加詞を C 統御する必要はないので、定形節の付加詞は文頭や文末など自由に生起する。

2 移動の違い

項の wh 要素の移動に関して、非定形節の付加詞の方が定形節の付加詞より容認性が高い場合があることは、これまででも指摘されてきた。(1) と (4) の違いだけでなく、Boeckx (2012: 30) が考察した関係代名詞節の例 (32) もある。

- (32) a. *A person *who* Robin got real drunk [after she thought about *t*]
 b. A person *who* Robin got real drunk [after thinking about *t*]

しかし、(1b) と (7b) から分かるように、非項の wh 要素の移動に関しては定形節・非定形節に拘らず容認されない。例えば、Michel and Goodall (2012) のように、実験調査を通してこれら 2 種類の付加詞の違いが確認されている⁸。

注意すべきは、これらの容認性の差は 2 種類の島からの移動に対応している点である。つまり、定形節の付加詞からの移動は強い島の特性を示し、非定形節の付加詞からの移動は弱い島の特性を示している。このことから、本稿では定形節の付加詞を強い島とみなし、非定形節の付加詞を弱い島とみなすという分析を提案する。

3 判断の多様性

Boeckx (2012) は、強い島の効果は統語制約に違反した帰結として生じるが、弱い島の効果は、文理解を含めた意味や語用論的な、非統語的な要因のために生じる、と論じている。この Boeckx の提案と本節での議論と考察を基にして次の仮説を立てる。

仮説 1

定形節の付加詞からの移動は、移動する要素が項・非項に拘らず、統語的な理由によって排除される。非定形節の付加詞からの項の wh 要素の移動は統語的に派生可能である（つまり、統語的には排除されない）が、非項の wh 要素の移動は統語的な理由によって排除される。

つまり、2 種類の付加詞を統語的に区別した Narita (2011) の基本姿勢は正しかったと考えて、その一部分を取り入れた仮説である。ただし、具体的な統語分析の方法に問題があったので修正が必要となる。また、Truswell の考えを部分的に取り入れて以下の仮説も採用する。しかし、非統語的な要因だけで全ての用例を説明するには無理があり、統語的な側面は無視できない。

仮説 2

非定形節の付加詞から項の wh 要素が移動した事例の判断の多様性は、非統語的な要因による。

ここで、付加詞からの抜き出しに関して、等位構造でも類似した興味深い例があることを指摘したい。一般に等位構造からの移動は許されないが、(33) に示したように、単一の事象の解釈が成立する場合には移動は可能となる。

- (33) John went to the store and bought some whiskey. (Ambiguous coordination)
- a. John both went to the store and bought some whiskey. (Multiple event)
 - b. What did John go to the store and buy __? (Single event)
 - c. *What did John both go to the store and buy __? (Harris's (2009) (8))

また、(34) から (36) に例示したように、因果関係や密接な順序関係などを表す場合にも等位構造からの移動が認められる。

- (34) Cause-Effect relations (Kehler (1996: 221))
- a. Violated Expectation (Goldsmith (1985))
How much can you drink __ and still stay sober?
 - b. Result (Lakoff (1986))
That's the stuff that the guy in the Caucasus drink __ and live to be a hundred.
- (35) a. Here's the whisky *which* I went to the store and bought *t*.
b. *Here's the whisky *which* I went to the store and Mike bought *t*. (Ross (1967: 93))
- (36) a. *Which dress* has she gone and *t* ruined now?
b. *Which granny* does Aunt Hattie want me to be nice and kiss *t*? (Ross (1967: 94))

これらの等位構造では、接続されている2つの句の間に意味的な密接な関係がある。この点で非定形節の付加詞の場合と類似している。また、構造に着目すれば、(34) から (36) は動詞の投射を等位接続した事例なので、この点でも、付加詞は動詞の投射に位置していると分析した(6)、(30)、(31)の構造と共通点がある。

ちなみに、(37) に引用したように、Takahashi (1994) は Higinbotham (1985) の「付加構造は等位構造としての解釈を持つ」という示唆を受けて、実際に付加構造に等位構造が反映しており、移動に課せられる条件に影響を与えると論じている。

- (37) “In chapter 2, I assumed with Higginbotham (1985) that adjuncts involve coordination, whereby I deduced the ban against adjunction to adjuncts from uniformity.” (Takahashi (1994: 68-69))

Takahashi (1994) の分析に対しては Stepanov (2007) の批判もあり、より詳細な分析が必要であるが、付加構造と等位構造の共通点は無視できないと思われる。

IV 派生理論による分析

1 非定形節の付加詞

本章では、付加詞からの移動に関する事例を、Stroik (2009) や Stroik and Putnam (2013) が

提案しているサバイブ・ミニマリズムという派生理論を仮定して説明する。まず、非定形節の付加詞について再検討してみよう。

Szabolcsi (2006: 488) は (38) を挙げて、付加詞からの移動は、移動する要素が項・非項であるというより、指示的 (referential) か否かという点が重要だと論じている。

(38) **How much water* did you make the pasta [after boiling *t*]?

本発表でも Szabolcsi の主張を取り入れて、Stroik (2009) の提案を基に、項の wh 要素 (その代表が what)、非項の wh 要素 (その代表が how)、時制演算子 (Temporal OP) が持つ素性を (39) のように仮定する。

- (39) a. what: [+operator, +referential]
b. how: [+operator, -referential]
c. Temporal OP: [+operator, -referential]

Stroik (2009) は、wh 要素が非項の位置を占めるか否かを表す [operator] という素性、wh 要素自体が項か否かを表す [referential] という素性を仮定している。この分析に従うと、項の wh 要素 what は (39a) の素性を持つ。これに対して、(39b, c) に示したように非項の wh 要素 how と時制演算子は [referential] の値がマイナスになり、項の wh 要素 what と異なる。

次に、具体的な派生を考察してみよう。(40) に示したように、時制演算子は vP の指定部にあるが、その主要部 v もこれと同じ素性 [+operator, -referential] を持ち、時制演算子の素性を照合する。両者の間に照合が成立すると、この時制演算子は vP の指定部に留まることになる。

- (40) a. [_{vP} OP [_v Ving wh]]
b. Numeration = {wh, Ving, v, OP}

(40) での OP のさらなる移動を禁止しているのが、(41) のサバイブ原理 (Survive Principle) である。この定義では、再併合 (Remerge) が従来の移動を指していることに注意されたい。

(41) The Survive Principle

If Y is an SO in an XP headed by X and Y has an unchecked feature incompatible with (i.e., cannot potentially be checked by) the features of X, Y must Rmerge from the WorkBench with the next head Z that c-commands XP. (Stroik (2009: 45))

(40) の非項の wh 要素が移動すると (42) が派生する。

- (42) a. $[_{VP} wh [_{VP} OP [_V Ving t]]]$
 b. Numeration = {wh, Ving, v, OP}

(39b) に示したように、非項の wh 要素の素性は時制演算子の素性と同一なので、vP の主要部と同じ素性を持つことになる。その結果として、時制演算子と同様に、サバイブ原理によって再併合は禁止され、vP の指定部に留まざるを得なくなる。もし派生が進んでゆき、(43) に示したように主節の C が導入されても、その [+operator] という素性は照合されることはない。

- (43) a. $[_{CP} C [... [_{VP} wh [_{VP} OP [_V Ving t]]]]]$
 b. Numeration = {wh, Ving, OP, ..., C}

そのような場合、Stroik (2009) によると派生はその時点で停止し、インターフェイスに転送 (Transfer) されない。このような理由で、非定形節の付加詞から非項の wh 要素が移動する事例は容認されないのである。

一方、項の wh 要素の場合は、(39a) に示したように、vP の主要部と素性の組み合わせが異なるので、上位へ移動してもサバイブ原理に違反することはなく、非容認性は生じない。

2 定形節の付加詞

ここでは、定形節の付加詞は非定形節の付加詞と派生が異なると提案する。そもそも、付加詞の派生については、ミニマリスト・プログラムの初期 (Chomsky (1993)) から別扱いにすると仮定されていた。例えば、付加詞の派生導入のタイミングについては、Chomsky (1993) は、wh 移動の後に反循環的に導入されると提案し、Stepanov (2007: 112) は、付加詞が強い島であることを説明するために、(44) に引用した遅発付加操作の仮説 (The Late Adjunction Hypothesis) を提案した。

(44) The Late Adjunction Hypothesis

“any adjunction must take place after all instances of substitution Merge have applied (in other words, post cyclically).”

サバイブ・ミニマリズムにおいても、Stroik and Putnam (2013) は、付加詞は派生の途中で併合されるという可能性を示唆している。

ここで、従来あまり注目されていなかった付加詞の 2 つの特徴に着目してみよう。まず、併合

の適用を受けても付加詞自体が投射する可能性はないという特徴である。また、付加詞は動詞の下位範疇化に関わらないという特徴もある。これら2つの特徴は、付加詞が当然のごとく持つ性質であると考えられてきたが、本稿で理論的枠組みとして採用しているサバイブ・ミニマリズムではうまく捉えることができないという問題が生じる。Stroik and Putnam (2013) は、「CAT 素性という範疇素性は照合されない時に投射して、新たな統語構築物のラベルになる」と仮定しているが、付加詞は派生の途中で併合されるという可能性を示しながらも、なぜ付加詞の範疇が新たな統語構築物のラベルにならないのかという、投射に関する疑問には答えが示されていないからである。

本稿では、下位範疇化されない補文標識 C があり、これが派生を終わらせるという Stroik and Putnam (2013) の提案に着目して、このような範疇が定形節の付加詞を形成すると仮定する。この仮説によって付加詞からの移動に関する事実は以下のように説明される。

まず、下位範疇化されない範疇 C が導入されて TP と併合すると、この範疇が根 (root) の CP を形成して、その統語構築物の派生は終了する。これが定形節の付加詞である。その帰結として、第一に、別の要素と併合しても定形節の付加詞は投射しないことになる。第二に、その CP 内部では統語操作は生じないことになる。もし、その CP 内部に wh 要素がある場合は、その素性が照合される可能性は無くなるので派生はその時点で停止し、転送されることもない。この結果、定形節の付加詞の中から外への移動は、wh 要素が項であろうが非項であろうが、許されることはない。

V おわりに

本稿での議論を要約すると、Truswell (2011) と Narita (2011) の分析の問題を克服しながら、付加詞からの移動を説明するために、次の2つの仮説を提案した。仮説1は Boeckx (2012) の提案をまた、仮説2は Truswell (2011) の提案を下地に行っている点に注意されたい。

仮説1

定形節の付加詞からの移動は、移動する要素が項・非項に拘らず、統語的な理由によって排除される。非定形節の付加詞からの項のwh要素の移動は統語的に派生可能である（つまり、統語的には排除されない）が、非項のwh要素の移動は統語的な理由によって排除される。

仮説2

非定形節の付加詞から項の wh 要素が移動した事例の判断の多様性は、非統語的な要因による。

また、仮説 1 を具体的に説明するため、Borgonovo (1997) の構造分析を採用し、理論的な枠組みとして Stroik (2009) と Stroik and Putnam (2013) のサバイブ・ミニマリズムの移動と素性の分析を援用した。

最後に、付加詞からの移動を説明するもう一つの仮説を示唆しておきたい。その背景にあるのは Polinsky at al. (2013) による再叙代名詞(resumptive pronoun)に関する最近の実験研究である。

従来の研究では、島の制約に違反している事例は、再叙代名詞が痕跡の部分に現れることで救われると考えられてきた。例えば、(45) では *which dish* が従属節（つまり、定形節の付加詞）からの移動が生じているが、*which dish* の痕跡の位置に再叙代名詞 *it* が生起しているので、島の違反の効果が出ないと分析されている。

(45) *Which dish* did Gina think that, although the chef overcooked *it*, the guests were not upset? (Polinsky at al. (2013: 347))

しかし、Polinsky at al. (2013) は、実験調査を通して、言語学者でない一般のネイティブ・スピーカーは (45) の事例を非文法的と判断する、ということを明らかにした。再叙代名詞があっても、実際には島の制約違反の回避にはつながらないのである。従来の研究では (45) は容認性が高いと論じられてきたのであるが、それは、再叙代名詞の事例を容認するのは言語学者ばかりであるという事実を反映した結果ということになる。言語学者は意図された意味になるように構文を解釈しようとするので容認性が高まると Polinsky at al. (2013) は論じている。

さて、毛利史生（私信）によると、Truswell (2011) が容認できると判断している事例を複数のネイティブ・スピーカーに判断を仰ぐと、否定的な判断をすることが多いようである。詳細な調査が必要なことは言うまでもないが、次に記した可能性も考えられるかも知れない。

仮説 3

定形節の付加詞からの移動も、非定形節からの移動も統語的に派生されない。強引に派生すると、定形節の付加詞は常に強い島の効果を示し、非定形節の付加詞は弱い島の効果を示す。ただし、非定形節から移動した場合は、意味的・語用論的な条件を満たせば容認性が向上する。

つまり、基本的には、定形節の付加詞からの移動も、非定形節からの移動も統語的に許されないが、非定形節の付加詞に限って、言語学者の判断が示すように意味的・語用論的な条件を満たせば容認性が向上するという仮説である。しかし、ミニマリスト・プログラムで仮定される狭義の言語能力(the faculty of language in the narrow sense)において生成されない構文⁹、あるいは、サバイブ・ミニマリズムで派生が停止した構文を、転送して解釈することが果たして可能なのか

という疑問は残る。

注)

- ¹ 本稿は日本英文学会九州支部第67回大会シンポジウム「動詞句の統語構造」（2014年10月25日、福岡女子大学）での口頭発表に基づいている。準備の段階とシンポジウムでは、藤本滋之、西岡宣明、中村浩一郎、古川武史、毛利史生、田中公介、吉村理一、Scott Binghamといった方々からコメントや助言を頂いた。記して感謝申し上げたい。本研究はJSPS科研費26370570の助成を受けている。
- ² Boeckx (2012)、Cinque (1991)を参照のこと。
- ³ この関連性をTruswell (2011)はcontingent relationと呼んでいる。
- ⁴ Reinhart (1976)の考察を参照されたい。
- ⁵ この「時を表す前置詞に認可される」という文言に関する詳細な議論に立ち入ることは、ここではしない。ただ、彼女の分析は動詞の投射に非項位置があること、また、機能範疇の投射があることを示唆している。
- ⁶ Nissenbaum (2000)、Stroik and Putnam (2013)も参照のこと。また、VP副詞と同様に、文頭への前置はできないことになる。ただし、いわゆる分詞構文との違いをどう説明するかという課題は残る。
- ⁷ Chomsky (2008)は、節の時制はCからTへの継承に拠ると論じている。したがって、本稿では、独立した時制を持たない現在分詞節はCを欠いた範疇であると仮定する。
- ⁸ ちなみに、Hiramatsu (1999)は、実験調査を通して、付加詞条件の違反はsyntactic satiationと呼ばれる、何度も読み返しているうちに容認してしまうという現象を示さないことを指摘している。そのため付加詞は他の島と異なると論じている。付加詞条件についての実験調査は、例文の質に注意しながら、検証し直すことが必要であると思われる。
- ⁹ 狭義の言語能力についてはHauser, Chomsky, and Fitch (2002)を参照のこと。

参照文献

- Boeckx, Cedric (2012) *Syntactic Islands*, Cambridge University Press.
- Borgonovo, Claudia (1997) "Parasitic Gaps and Participials," *Langues et linguistique* 23, 21–29, Université Laval, Canada.
- Borgonovo, Claudia and Ad Neeleman (2000) "Transparent Adjuncts," *Canadian Journal of Linguistics* 45(3/4), 199–224.
- Chomsky, Noam (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 1–52, MIT Press, Cambridge, MA.

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) “On Phases,” *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cinque, Guglielmo (1991) *Types of A'-Dependencies*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Goldsmith, John (1985) “A Principled Exception to the Coordinate Structure Constraint,” *CLS* 21, 133–143.
- Harris, Jesse A. (2011) “Extraction from Coordinate Structures: Evidence from Language Processing,” *Proceedings from the 45th Annual Meeting of the Chicago Linguistic Society*. <http://www.linguistics.ucla.edu/people/harris/stuff/papers/harris_cls45.pdf>
- Hauser, M., Chomsky, N., and Fitch, T. (2002) “The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve?” *Science* 198, 1569-1579.
- Higginbotham, James (1985) “On Semantics,” *Linguistic Inquiry* 16, 547-593.
- Hiramatsu, Kazuko (1999) “Subject and adjunct island asymmetries: Evidence from syntactic satiation,” *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 18, 183–192.
- Huang, James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kehler, Andrew (1996) “Coherence and the Coordinate Structure Constraint,” *BLS* 22, 220–231.
- Lakoff, George (1986) “Frame Semantic Control of the Coordinate Structure Constraint,” *CLS* 22, Part 2, 152–167.
- Michel, Dan and Grant Goodall (2012) “Adjunct Islands and the Finiteness Effect,” an abstract of the paper presented at Twenty-Fifth Annual CUNY Conference on Human Sentence Processing, March 14–16, 2012. <http://cuny2012.commons.gc.cuny.edu/files/2012/03/2012booklet_post-print.pdf>
- Narita, Hiroki (2011) *Phasing in Full Interpretation*, Doctoral dissertation, Harvard University.
- Nissenbaum, Jon (2000) “Covert Movement and Parasitic Gaps,” *NELS* 30, Volume 2, 541–555.
- Polinsky, Maria, Lauren Eby Clements, Adam Milton Morgan, Ming Xiang, and Dustin Heestand (2013) “Resumption in English,” *Experimental Syntax and Island Effects*, ed. by Jon Sprouse and Norbert Nornstein, 341–359, Cambridge University Press.
- Reinhart, Tanya (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

[Reprinted by the Indiana University Linguistic Club, Bloomington, Indiana]

Stepanov, Arthur (2007) “The End of CED? Minimalism and Extraction Domains,” *Syntax* 10, 80–126.

Stroik, Thomas S. (2009) *Locality in Minimalist Syntax*, MIT Press.

Stroik, Thomas S. and Michael T. Putnam (2013) *The Structural Design of Language*, Cambridge University Press.

Szabolcsi, Anna (2006) “Strong vs. Weak Islands.” *The Blackwell Companion to Syntax*, Volume 4, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 479–531, Blackwell Publishing, Malden, MA.

Takahashi, Daiko (1994) *Minimality of Movement*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Truswell, Robert (2011) *Events, Phrases, and Questions*, Oxford University Press.

